アジアのことばを学ぶ ⑲

高等学校韓国語教師研修会から

「アジアのことばを学ぶ」では
教師だけでなく
学習者の視点も取り入れながら
中国語と韓国朝鮮語教育の現況を
紹介していきます

8月27日から29日までの3日間にわたって、東京のYMCAアジア青少年センター(韓国YMCA)で高等学校韓国語教師研修会が開催されました。駐日大韓民国大使館・韓国文化院が主催し、TJFは会場となった韓国YMCAとともに、この研修会を後援しました。韓国朝鮮語教育に取り組む高等学校は、現在150校近くに上ると見られますが、現職教員が一堂に会する機会はこれまでありませんでした。高校の韓国朝鮮語教師34名と大学関係者などが参加し、教師たちが抱えている問題、めざしているネットワークや研修会の今後の方向性について活発に意見交換がなされました。今回のシリーズ「アジアのことばを学ぶ」では、研修会に参加した教師たちの発言をまとめてみました。

今回の研修会の意義は

――今回は集まるだけでも意義があったと思います。ややもすれば孤立し、一人で授業をしている私たちが、これだけたくさんの仲間に会えただけでも勇気が出たように思います。

――私が教えはじめたころ、高校の韓国語教師は周囲にまったくいませんでした。ずっとネットワークを望んでいましたので、10年後にこうした研修会が実現して、とてもよい刺激を受けました。

何から取り組むべきか

――韓国語能力試験などを基準にしながら、教師の中で統一教科書を作ってはどうかと思いました。悩みながら教えていると思いますが、教科書問題を解決していくことを考えていきたい。

――教科書を作るとなると、高校生の学習到達度の基準が必要ですが、まず底辺を広げることが重要だと思います。既存の教材を使用して、その評価を行うのもよいと思います。研修会と同じ予算で全国の高校に教材や辞書を寄贈して、韓国語の普及につなげていくことも考えていいのではないでしょうか。

――生徒が韓国語をやってよかったという感想を持ち、後輩にそれを伝えていく。そのためには教材の工夫が必要です。自分で自分の首をしめたりしないよう、到達度を決めるようなことではなく、参考例として教材を作るのがよいのではないでしょうか。

――生徒や周囲が関心を持つような日々の授業のあり方が大事です。毎年同じ教材を使っていますが、中身の質的な向上を考える時期に来ているのではないかと感じています。量的な拡大と質的な拡大を考える必要があると思うのです。

――底辺拡大は賛成ですが、情報交換だけでも意味があると考えています。大阪も兵庫も長年細々と韓国語教育を続けてきましたが、ネットワークはできませんでした。情報交換、交流、実践報告、センター入試、私立大学の入試科目に加えてもらう活動などにつなげたいと思います。そういう動きがないと、質・量の拡大につながらない。より広い人が集まるよう、ゆるやかな組織があってもよいと思います。

――教材作成より普及に関心があります。教材と普及は分けて考えた方がよいと思います。韓国文化院や国際文化フォーラムなど支援団体に普及について考えてもらいたい。大阪は人権教育という窓口があり、地方には高校の生き残りとして新しいカリキュラムの設定がありますが、東京にはそういう問題がないので、どのように普及したらよいか難しいのです。

――堅苦しいことばで伝えるのではなく、小学生や中学生に韓国について知ってもらうきっかけを作るようなことをしていきたいと思います。

――朝鮮や韓国に対して偏見を持っている人が多いのも事実ですが、子どもたちが妙な偏見に対して疑問をもつようになってほしい。みんなの意識を変えることから始めたいと思っています。

研修会をどのような場にするのか

――今後はモデル授業など、具体的に明日の授業に役立つような形がよいのではないでしょうか。

――今年から常勤講師でかかわるようになり、どのように授業展開をしたらいいか一人で悩んでいましたので、こうした機会に授業例や文化祭の取り組み

など具体的な教育実践が聞ければよいと思います。自分も語学や文化を勉強していかなければならないという気持ちを新たにしました。来年以降、教員研修の場として教員が専門的に勉強する機会となるようなプログラムを組めればよいと思います。

――朝鮮語はほかの語学教育に比べて基本的な研究が足りないと思います。教師自身の実力アップのために勉強会の場が必要だと思います。ネイティブの教師にも勉強してもらうことがあると思うのです。研修会は勉強会としての役割も果たしてほしい。その積み重ねが教材作成やネットワークにつながると思うのです。日本で行われている朝鮮語の研究などについて勉強会があればよいと思います。

――開講はしていなくても韓国語学習を続けている教師にも、今回の内容を報告したいと思います。民族問題を抱えながら、進学校などそれぞれの立場の人が悩みを持ち寄って相談、検討できる場がこの研修会ではないでしょうか。地道でいいから、忌憚のない意見が出せる場にしてほしいと思います。その検討結果をまとめたものとして教科書ができればよいと思います。毎年研修会を開催し、参加者を拡大していくことが望まれます。教師の研修の場であり、教師自身のつながりを増やしていくことで、今後の研修会の方向性が見えてくるのではないでしょうか。

――今回は文化院の世話で出席していますが、非常勤講師が多いだけに、堂々と出張で来られている人は少ないのではないでしょうか。出張で来られるような状況を作っていくなど、それぞれの先生方が集まりやすい形態を作っていく必要があると思います。今後ネットワークの中で検討を重ねながら、開講を予定している人も参加できるような会ができればよいと思います。

――今後、現場でがんばるという気持ちを新たにしました。韓国大使館の文化院主催でいいにくいのですが、北の国籍を持っている先生方も参加できるようになればよいと思います。教育の立場では南北いっしょですから。

――二、三年は文化院とTJFが共催のかたちで研修会を開催していくのがよいと思いますが、いつまでも参加者がお客様気分ではいけないと思います。財政的な援助は必要ですが、主体は教師であるべきです。

写真提供：韓国文化院

ネットワークをどのように発展させるのか

――今の段階は積み重ねが大事でしょう。将来的には組織づくりが必要ですが、ここ数年は情報交換を続けることが大事だと思います。また、センター試験、私大への働きかけが必要だと思います。入試との結びつきは重要です。教師も生徒も熱が入り、チャレンジする生徒も出てくると思うからです。

――拠りどころとなるような集まりがぜひ必要だと思います。センター試験や韓国政府へのアピール、授業実践例の交換を吸収できるようなバックボーンが必要です。何かをアピールするには、個人の意見よりも組織としての方が力があると思います。せめて地域の世話人、世話人の連絡会、意見交換のできる機関紙の発行ができればよいと考えています。

――神奈川でも社会科の課題研究で韓国語教育を実施しているケースが多く、県下で三、四人います。そういう仲間に勉強する機会を与えてほしいと思います。2002年の教育課程改訂で、小学校では総合学習の柱として国際理解や福祉などが入ってくると予想されます。せっかくのチャンスですから、小学校で韓国語をプロパーでやるのは難しいとしても、小学校の先生にそのモデルを提示することはできるのではないでしょうか。チマチョゴリ、ビビムパなどを使った国際理解教育のモデルを提示するような手伝いはできると思うのです。

――大阪では100校以上の小学校で民族学級を実施しています。その例も参考になると思います。

★紙面の都合により、発言内容の一部を編集しています。研修会については、韓国文化院監修の『韓国文化』11月号（pp. 36-39）に講師の発表を中心とする記事が掲載されています